

轉換期の經濟と社会

——現代社会の論理を超えて——

山崎益吉著

多賀出版

山崎 益吉

昭和17年 群馬県生まれ。

昭和40年 高崎経済大学卒業

現 在 高崎経済大学助教授

(経済思想史，日本経済思想史担当)

著 書 『高崎の経済と産業の歴史』 高崎経済

大学附属産業研究所編 (共著)

『横井小楠の社会経済思想』 (多賀出版)

転換期の経済と社会

昭和55年12月1日 印刷

昭和55年12月10日 発行

著 者 山 崎 益 吉

発行者 多 賀 省 次

印刷者 堀 久

製本者 高 橋 幸 三

発行所 多賀出版株式会社

東京都千代田区蔵田橋3-2-12

山田ラインビル2F

電話：03 (262) 9996(代)

振替口座：東京 8-84518

落丁・乱丁本はお取替えます。

第一印刷所／美行製本

1033-800052-4484

は し が き

筆者が高崎経済大学に奉職したのは昭和四十四年であるから、今年（昭和五十五年）は十二年目になる。この間、筆者は学生時代に籍をおいた経済研究部の同人雑誌『経済研究部論集』に毎号寄稿してきた。さらに、この間高崎経済大学附属産業研究所所員として『所報』に寄稿してきた。本書はこの間、主に両誌に寄稿した論文をベースとしている。

別の見方をすれば、この期間は、筆者が七〇年代の経済と社会にどう関わってきたか、ということにもなる。この間、いろいろな側面から現実の諸問題にアプローチしてきたが、終始一貫していることは、常に危機意識に立って物事を把握している、ということである。例えば、経済研究部の『論集』にはじめて寄稿した論文は、『一九七〇年代の経済と社会』（昭和四十五年十月）と題するものであった。その中で、筆者は、「六〇年代は経済的にみて史上この上ない物質的繁栄をもたらした。だが、それが全面的に人間を幸福へと導いたかという点、決してそうではない。その裏面として、人間の自己疎外化が叫ばれるようになり、したがって、六〇年代は大局的に見て物質的繁栄と人間疎外に代表されるといってよい」と強調した。

そして、これから始まる七〇年代の経済と社会について、次のように述べた。「然らば、七〇年代は歴史的・社会的現実としてどう把握されるであろうか。六〇年代の遺産はどう受け継がれていくであろうか。まず、経済的側面からみると物質的繁栄は、六〇年代に引き続いてますます増進されるであろう。他方、人間の精神的側面はどうかというと、人間の自己疎外化現象がますます深刻化するであろう。このように、両極はますます乖離すると思われる

る。結局、経済的繁栄と精神的貧困化がはっきりと分かれてくるであろう。こうした現象は全体的にながめた場合、危機として承認せざるを得ない」と。

このように、筆者は七〇年代の経済と社会を危機の時代として捉えた。いまふりかえてみても、こうした認識に大過ないと思っている。そして、八〇年代の幕開けに、『七〇年代の経済と社会』からまる十年、同じ経済研究部の『論集』に、『八〇年代の経済と社会』を寄稿した。その副題は、「豊かな社会から美しい社会へ」である。『七〇年代の経済と社会』を危機意識で捉えたが、『八〇年代の経済と社会』は、文字通り、「豊かな社会から美しい社会へ」移行しなければならないと思っている。そういう意味で、今日の経済と社会は、まさに転換期にさしかかっているといえよう。

ここで、本書の構成について簡単に触れておこう。前述したように、第一章から第十章まで既に発表した論文である。これらの論文は、それぞれの時期に、筆者が最も関心を寄せたテーマであった。が、いまこうしたかたちで並べかえてみても、決してバラバラに論じられてはいない、ということがわかる。つまり、七〇年代の知的生産は不思議にも、その根柢に「一以貫之」姿勢があったことに気づく。それは危機意識であり、転換期意識である。

第一章では、本章全体を貫くイデオロギイを経済危機を通して論じ、社会哲学の必要性を強調しておいた。第二章、第三章、第四章はそれぞれ、日本経済論、日本農業の現状、そして日本の経済学の実情についてそれぞれ危機意識に立って論じたものである。さらに、第五章、第六章、第七章では、現代社会における労働観について述べた。最終的に危機を救ってくれるのは労働以外にはない、と考えたからである。そして第八章、第九章では八〇年代の経済と社会について、エネルギーとの関わりを論じておいた。八〇年代の最大の課題がエネルギー問題である、と考えたからである。最後に第十章では、転換期を強調するため、横井小楠の総合大観に視点を当て本書の結論とした。

筆者があえて不統一とも思える諸論文を、なぜこうしたかたちで一冊にまとめ上げたかという点、前述したように、七〇年代の知的生産をひとつの証として残しておきたい、と考えたからである。そして、そのことは『八〇年代の経済と社会』について、今後どう関わっていかねばならないかの指標ともなれば、と思うからである。

筆者は、これまで多くの方々から御指導を仰いでいる。そのなかで特に、難波田春夫、日下藤吾、柴田敬の諸先生方の学恩を忘れることはできない。難波田先生からは『国家と経済』、『近代日本社会経済思想史』、その他の書物、さらに先生が主催される経済学研究会、日下先生からは大著『唯物史観の再吟味』、その他の書物、さらに先生が主催される社会思想研究会、柴田先生からは『経済学原理』、『転換期の経済学』、その他の書物、さらに先生が主催される理論経済学研究会を通して、それぞれ研究させていただいている。本書は、これらの書物ならびに研究会を通して得た考え（原理）をそれぞれの分野で発展させたものである。どこまで先生方の真意に迫れるか、たいへん心もとないかぎりであるが、ひとまず研究の一端を披瀝し御叱正を乞う次第である。不足の分は今後の研究をまわしたい。

本書の出版にあたって、多賀出版社の取締役多賀省次氏、並びに編集部の小林達也氏にたいへんお世話になった。記して感謝の意を表する次第である。

昭和五十五年七月

山崎 益吉

目 次

はしがき	1
第一章 経済危機を超えて——現代社会哲学の基礎——	3
第一節 経済危機の実態	3
第二節 経済社会の本質	5
第三節 近代社会の実態	9
第四節 経済危機を超えて	13
第五節 現代社会哲学の基礎	16
第二章 低成長時代に入った日本経済	21
第一節 七〇年代の危機意識	21
第二節 高度成長時代の終焉	24
第三節 低成長時代への提言	29
第四節 今後の展望	45

第三章	日本農業の現状——高度成長と農業の変貌——	五一
第一節	高度成長と農業の変貌	五一
第二節	日本農業の現状	五四
第三節	群馬県甘楽町天引北部地区の実態	五八
第四節	農政と農業の変貌	六六
第五節	高度成長と農村の貧困化	七〇
第六節	日本農業の展望	八〇
第四章	日本における輸入経済学の危機	八九
第一節	経済学の危機	八九
第二節	戦前における日本の経済学	九二
第三節	戦後日本の経済学	九八
第四節	七〇年代と日本の経済学	一〇五
第五節	経済学の現代的課題	一〇七
第五章	現代社会と人間疎外——低成長時代における労働概念——	一一五
第一節	低成長時代における労働概念	一一五

第二節	最近の雇用情勢	一六
第三節	マルクスの疎外論	二〇
第四節	低成長時代における人間疎外	二五
第五節	労働の喜び	二七
第六章	労働の哲学Ⅰ——現代社会と労働概念——	三三
第一節	労働の意味	三三
第二節	近代以前の労働観	三五
第三節	A・スミスの労働観	三七
第四節	K・マルクスの労働観	四一
第五節	柴田敬博士の労働観	四六
第六節	残された問題	五二
第七章	労働の哲学Ⅱ——尊徳と梅岩——	五九
第一節	日本の労働観	五九
第二節	尊徳の労働観	六〇
第三節	梅岩の労働観	六四

第四節	経済と道徳	一六八
第五節	本来の労働	一七二
第八章	省エネルギー時代と市民生活——真の節約を求めて——	一七五
第一節	省エネルギー時代	一七五
第二節	石油はどれ位消費されているか	一七六
第三節	五パーセント節約の背景	一八二
第四節	省エネルギーの実例	一八三
第五節	代替エネルギー	一八五
第六節	エネルギー（石油）問題解決への道	一八九
第九章	八〇年代の経済と社会——豊かな社会から美しい社会へ——	一九三
第一節	八〇年代の課題	一九三
第二節	豊かな社会	一九五
第三節	真の節約を	一九八
第四節	美しい社会へ	二〇二
第十章	転換期の思想家横井小楠	二〇七

第一節	至善の人横井小楠	二〇七
第二節	真の儒者	二〇八
第三節	真の政治家	二一〇
第四節	総合大観	二一三
索引		

轉換期の經濟と社会

——現代社会の論理を超えて——

第一章 経済危機を超えて

——現代社会哲学の基礎——

第一節 経済危機の実態

昭和五十一年暮、群衆がジャンボ宝クジに一獲千金を夢みて押しかけ、ある人が群衆の下敷となり生命を落とすという事件が起きた。なんとも痛々しいかぎりである。反面、経済社会もついにここまで来たか、と溜め息をもらさずにはおれなかった。筆者も、子どもの頃、近所の店で「さぐり」という一種の宝クジみたいなゲームを楽しんだことがある。が、これなどは五円、十円で子どもの夢をかなえさせてくれ、いまでも、「さぐり」を引きなにか目玉が当たらないものか、と胸をときめかせたことを、よく覚えている。宝クジもこの程度ならよい。先年、東欧諸国を廻ったときルーマニアの首府ブカレストの街角で、ミニ宝クジが売られていたが、この程度なら子ども心を呼び戻す程度であるから、庶民の娯楽のひとつと見なしてもよいであろう。だが、五十一年暮のジャンボ宝クジは、とてもこうしたイメージからはど遠い。死人が出るとあつては狂気の沙汰というほかない。

また、人の生命を扱う病院を例にとってみよう。私の知っている人がある病院で風邪のため診察をおおいだ。医師は即座に看護婦に注射を命じ、私の知人は注射を打ってもらった。ところが、どうしたとか、自宅に帰って三〇分とたたないうちに生命を落としてしまった。この死を注射のせいだと速断することは早計であろうが、少なくとも注射が最大の原因であることは確かなのではなからうか。従来、大方の場合なにも知らない患者が泣き寝入り

を余儀なくされてきたが、ある専門医の書いた『誤診』という書物を見ると、医師の手違いで生命を落とすことは珍しくないとのことである。なんとも恐ろしいかぎりで筆者はないか。ところで、この事故で筆者がいたいのは、この点にあるのではない。この事故も経済至上主義の一現象にすぎないと強調したいのである。なぜならば、医師の門を叩いた人であれば、医師がいかに注射を打ちたがるかがわかる。なぜ注射を打つかといえば、注射を打つ方が経済効率がよいからである。いまの医療制度は注射を打たないと儲からないようにできているからである。つまり、医師だけでは病院を経営することができない、というのが開業医の実態のようである。そこで、医師は注射を打ちたがり、大量の投薬を行う。だが、こんなことで患者が犠牲にされたのではたまったものではない。医薬分業が強調されながら、なかなか実現できないのはこのへんにも事情があるのではなからうか。それにしても、生命が経済至上主義の対象となつているところに、今日の医の本質的な欠陥があるといわねばならない。医は仁術なりといわれたのは過去へのたんなる郷愁にすぎないのであろうか。

さらに、経済危機は国家レベルで論じても同じことがいえる。ロッキード事件がその典型といえよう。一国の首相をはじめ国会に証人喚問された人々がどのような言動を示したかは、まだ記憶に新たなところである。この事件は、宝クジ事件や医者 of 経済至上主義などに比べ質量ともに問題にならぬほど大きいわけであるが、何といっても善良な国民の期待を裏切ったことが最大の罪惡ではなからうか。「私は嘘を申しません」、「そういうことは記憶にございません」という言葉ほど空々しく聞こえるものはなからう。本来ならば、最も誠実であるべきこの言葉が一国の最高責任者の口から出たことを考えるならば、何を信頼してよいかわからなくなる。やはり、頼るは金しかないのか。

経済主義が貫徹するところ草木もはえない。すべて経済という得体の知れぬ欲望に平伏している。経済主義とい

う至上命令のため、人間は本来の人間性を喪失し、企業は企業自体の在り方を喪失し、その存在を根本的に問われている。国家も然りである。このように経済は魔物である。mamon(金)以外のなものでもない⁽¹⁾。これが経済社会の実態であり、経済危機の実態でもある。

しからば、この経済社会はどこから来てどこへ行くとするのか。文字通り、経済社会はcrisis(危機)に直面せざるを得ないのか。それともこのcrisisの中から現代社会を支える新しいGrund(原理)が芽ばえてくるのであるのか。はたしてその可能性はあるのか。あるとすればどのような方法においてか。そこで本章では、難波田春夫教授の自同律、相互律を根拠に据え、このような視点から経済危機の実態を把握し、さらに近代社会の本質を究明した上でその限界を指摘し、現代の社会哲学の必要性を提示しようとするものである。

第二節 経済社会の本質

さて、このような現実に対して人々は一般に「資本主義社会はそうならざるを得ない必然性をもっているのだ」と速断するかもしれない。だが、事はそれほど単純ではないのである。なんとすれば、今日の社会を資本主義であるという規定を否定するつもりはないが、ただこうした規定だけでは十分ではないからである。

この時代を資本主義として最初に特徴づけたのは、スミスでもなければマルクスでもない。ゾンバルトその人であった。ゾンバルトは、『近代資本主義』の中で、「資本主義」という言葉を使用して近代市民社会を特徴づけた。これに対してスミスやマルクスは、資本主義という言葉を近代社会に固有なものとして使用してはいない⁽²⁾。周知のように、スミスはあくまでも商業社会の範囲を出ていない。分業と交換によって commercial society (商業社

會)が形成される、と説いたにすぎない。また、マルクスは資本主義的・という言葉を使用してこの社会に固有な生産様式に注目する。つまり、マルクスは資本主義的・生産様式という概念を披瀝するが、決して資本主義という言葉を近代市民社会に固有なものと見なしてはいない。換言すれば、マルクスは近代市民社会の特質を生産様式に求めたのであって、それではこの生産様式に特徴を求めるときそれは資本であるとして資本主義的という言葉を使用したままでのことである。だが、このことはスミスが労働価値説をすつきりしえないまま放置した盲点をついている。だが、今日資本主義的生産様式を近代市民社会における特徴と承認しえたとしても、前述したごとく、資本主義によって、経済危機が起こっているのだと速断することはできないのである。

資本主義や資本主義的生産様式の他に近代社会を特色づけることができるならば、それはいったいどのような原理か。先のゾンバルトは、『近代資本主義』で近代社会を資本主義時代と規定しておきながら、実はこれを放棄している。その後彼は、『ドイツ社会主義』の中で、それをM・シェラーにならって「経済主義時代」(das ökonomische Zeitalter)と規定した。すなわち、ゾンバルトにいわせれば、近代社会は呪術が支配した時代、政治が支配した時代と比較して経済が支配している時代だと規定するのである。つまり、近代社会を特徴づけるため経済よりも大きな範疇から考えねばならず、資本主義とか資本主義的生産様式とかいう特徴づけは第二義的解釈にすぎない、と考えたわけである。つまり「近代社会はたしかに、資本の優位のもとに営まれている。このこと自体に間違いはない。けれども、このような在り方で特徴づけられるものが、人間生活におけるあらゆる領域のなかで優位を占め、無数の要因の複合である現実のなかで決定的な地位を占めるようになっていくことの方が、より包括的な特徴、より重要な徴標である。資本主義という特徴はさてそれではその経済の特徴はと問われた場合にはじめて取り上げられる二次的なものにすぎない」というのである。したがって、現代社会の経済危機を資本主義のせい